

みんながかたるましきまち

A班 小川連太郎・山田芽・大塚里実・王光耀



課題解決の概要

①課題背景

【益城町の概要】

- ・総人口：33,383（令和3年5月末現在）；世帯数：13,804
- ・総面積：6,568ヘクタール
- ・行政区域：飯野村、福田村、木山町、津森村、広安村

【益城町の震災概要】

- ・震度7を2回観測した地域
- ・インフラ被害：被災家屋は全体の約98%、町有施設全58施設中48施設が被災された（道路ネットワークの甚大な被災など）
- ・人間の被害：人口が1498人減少した（災害によるストレスなど）
- ・自然の被害：天然記念物指定（布田川断層帯など）
- ・5年間での復興
- ・公共インフラがほとんど復旧し終わっている
- ・被害された人々のソフト面の復興を中心に始めた（地域福祉を充実させる、人々の心のケア、熊本地震記憶の継承など）
- ・各組織との連携で、益城町の復興に関する完備の資料を作成していた



②中心問題

【課題の振り返り】

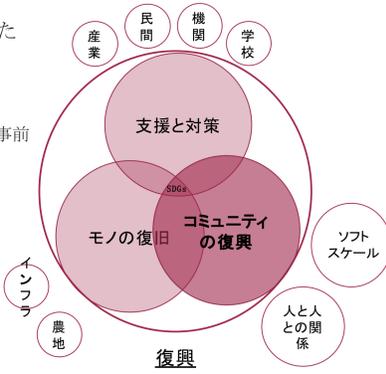
- ・「支援と対策」「モノの復旧」「コミュニティの復興」の三つの要素の相互作用で持続可能な復興ができる
- ・記憶の継承に対する課題の切り口を「人と人との繋がり」と「精神や心理的なスケール」からみた

【事前調査のまとめ】

- ・益城町役場（岩本さん）へのインタビュー調査
- ・復興には2つある。公共インフラと被害された人々の復興
- ・自分が住んでいる地域の危険性・リスクを知っておくことは大切→対策を事前に考えられる
- ・「自分たちで何とかしないと」という意識が減った
- ・地震を「忘れたい」と思う人もいる
- ・益城町現場調査
- ・仮設住宅：仮設住宅内での被災者同士のコミュニケーションが少ない
- ・潮井神社：地震のもたらした甚大な被害をそのまま遺構として残している

【中心問題】

震災における意識が薄くなっている



③課題設定

《次世代への震災記憶を伝えるきっかけが少ない》

提案施策

①調査対象の範囲

小さいコミュニティ（家族、まちづくり協議会…）

②提案内容

益城町で被災した方々の震災における知恵（経験）をインタビューしてポスターにする

③調査方法

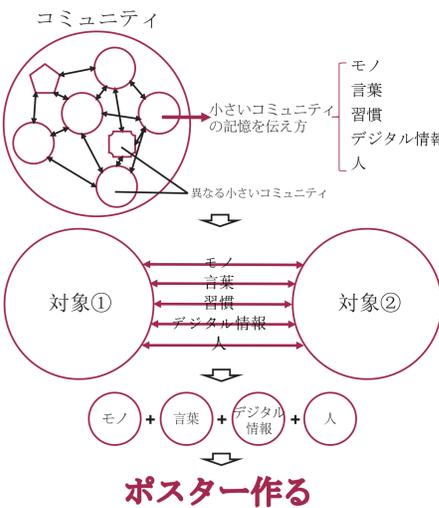
益城町の人にインタビュー

【ポスターを作る方法を選んだ理由】

- ・ポスターは情報をまとめやすい、人に見やすいと共有できる特性を持っている
- ・人々が震災におけるコミュニケーションのきっかけになりやすい

【ポスターの内容】

- ・災害を経験した人の言葉や知恵（教訓ではなく）は、「自分ごと」として捉えやすい
- ・益城町の住人（自分の知っている人、自分と同じところに住んでいる人）が載っていることで、記憶に残りやすい



課題解決のストーリー

①対象

- ・益城町の小中学校
- ・益城町役場
- ・益城町郷づくり協議会
- ・益城町教育委員会

②場所と方法

【場所】

益城町内の学校や公民館の掲示板

【方法】

- ・インタビュー調査
 - 自分の体験を思い出すきっかけとなる写真やキーワードを踏まえ、対象にインタビュー調査を行う
- ・ポスター作成
 - 自分の地震の体験をみんなと共有するためのポスターを作る

④ポスターデータ

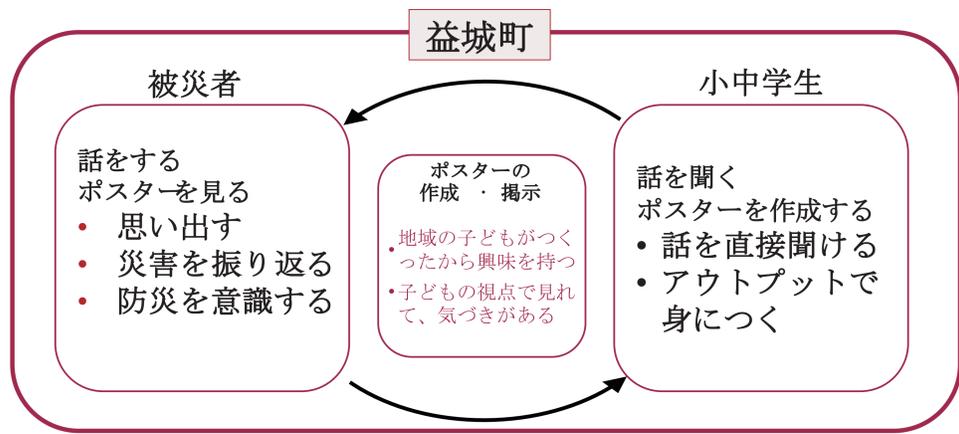
みんながかたるましきまち

みんながかたるましきまち

みんながかたるましきまち



③課題解決のストーリー



みんながかたるましきまち

みんながかたるましきまち



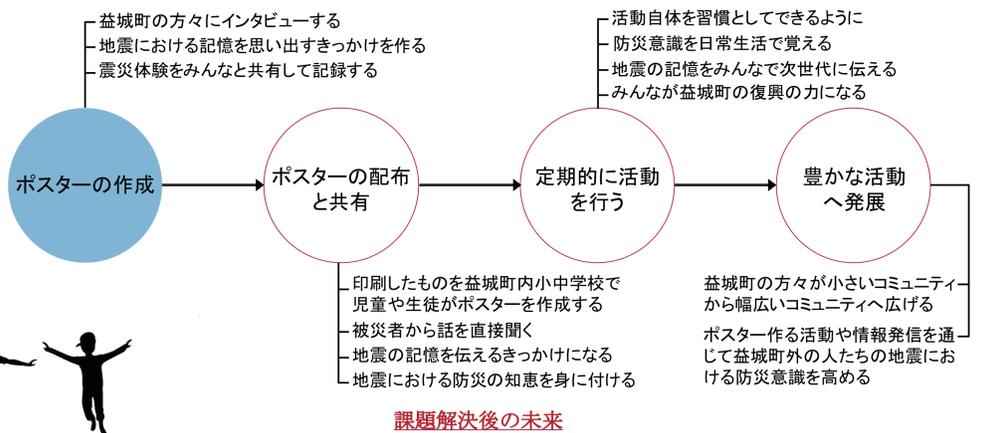
結論

①結論

ポスターを通じて、次世代へ震災記憶を伝えるきっかけを増やし、地震に対する意識を高めていく

②課題解決後の未来

自治体ごとに、ポスターのような記憶を伝えるきっかけを増やす方法を活用し、各組織と連携して定期的にこのような活動を行い、震災の記憶を忘れずに継承していく。



熊本地震から5年、その先へ。
水の国くまもと
未来予想図プログラム



課題解決後の未来